

三里塚闘争の原点をたずねて

東峰部落 島村さんの家族にインタビュー 上

10・21
総決起の
ために③

日刊 動労千葉

79.10.10
No. 244

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二五八・九(公衆)四三三・二七二〇七

「この土地はヨ、私の分身なんだ」

10・21国際反戦デーにむけ「二期工事阻止・国鉄三五万人合理化粉碎・ジェット増送阻止」のストライキ実現をめざして、今、職場での組織化が立ち上がり今一度それを再確認してみたくて、の原点、労農連帯という事の原点とは一体何なんだろうー今一度それを再確認してみたくて、一〇月のある日、東峰部落で闘いぬいておられる島村さんのお宅を訪ねた。夕食前のひとときで、ちょうど居間では、島村良助さんと奥さんが、この三月に生まれたお孫さんをあやしながらくつろいでおられた。台所では息子さんの昭治さん夫婦が東京から援農に来ていた労働者と食事をしている所だった。どうぞ、どうぞと快よく取材に応じてくださった。

(一) 生いたち

(1) 農家の二男坊が東京へ、そして戦争
私の生まれは実は新潟の雪国の農家の二男坊でしてネ、あまり財産もなかったから、ひとつ東京に出て・・・というので二六の年に上京し東京で知りあった女房と所帯をもったス。女房も青森の農家の出なんスヨ。

三八位の時かねえ、あの大東亜戦争も相当きびしくなって東京空襲なんかという話になったんで、女房と小供をネ新潟に疎開させたんです。で私は昭和二〇年の三月に赤紙の召集をうけて舞鶴の軍団に入団したです。八月の終戦のときは、だから内地で解除になった訳です。

(2) 焼け野が原の東京へ、再び

とりあえず一〇月ごろ家族は新潟に残したまま東京に帰ってきたんだけど、ま、元の職場も家も何にもありませんわネ・・・焼け野が原だかっネ。早く生活の基盤ととのえて家族をよび寄せなくっちゃとあせっても、なんせ自分一人が食って行くのがやっとでさ、一日一日が必死だったですネ。

(二) 三里塚へ、商いの傍わら開墾の毎日

(1) 成田名産・落花生

たまたまこの十余三の人から勧められて成田の名産の落花生をヨ！当時はこれも統制されてたから一応ヤミ売りになるんだけどネ、ま、生きてく上ではしょうがないわサ！東京まで運んでって売りに歩いて、なんとか食っていけるヨというんで、女房が成田の方に知り合いを頼って出てきていた。女房がネ二才の子供をおぶって、四才の女の子を歩かせてね、当時はまだバスも通ってなかったから十ヨ三から朝五時頃起きて、二貫目か三貫目の落花生を担いで成田から東京まで通ってたんスヨ。私はそのころまだ東京に居たんだが、やっぱり、大した仕送りもできないーそれならいっそ、とうちゃんもこっちに来て何とか二人で工夫すれば、

それに寒くなってーちようど一二月、一二月と二ヶ月間やりましたからネ女房は子供たちを五時に起してつれ歩くのもかわいそうだから、というので、翌年正月から私も十余三の方に腰をおちつけるようにしたんですワ。

(2) 県有地解放運動

もちろん親せき・縁故もなかったから、村の大師様のお堂を貸してもらって一家四人が何とか雨露をしのいだというあんばいでした。どんなにかほんの少しでもいいから自分の土地が欲しい、とネ。本当に、自分の手で米を作りたかったですヨ。そうこうしているうちに復員者対象の県有地払い下げの運動がもち上って、私も遠山村の仲間をつくってね、村や県にかけ合ったり陳情したりで、かれこれ五年間位にわたって県有地解放運動をやったです。そのころは、全国的にも地主からの小作地解放運動や、死んだ小川明治さんなんかの宮内庁相手に御料地を解放せよの闘争なんかもあって、この辺一帯に開墾の鍬が入りはじめていた頃です。

(3) トンビ鍬一丁で・・・まるで「土方仕事」サネ

私ら三六人の入植希望者に対して県は三五町歩しか払い下げないというので、これじゃ農民として自立してやって行けない。最終的には二八人に減って、一人平均一町二反歩ーまあ、帯に短かしたスキに長しの状況だった。それでも五年近くかかった。

それこそまるで山と竹やぶなんだから大変だった。ここいら辺にはこんな大きな松の木があってね。それも立派な立ち木はみんな県がもって行ってちゃって、根っこだけ残してある。それをトンビ鍬で掘り起して焼いて、まるで土方工事のよう、手の皮を真赤にはらして、それはそれは難儀な仕事だったワナ。(つづく)

